

第3節 デジタルカメラを用いた小学校における授業実践3

A 授業実践の概要

本授業実践の目的は、小学生第5学年を対象にデジタルカメラを利用し、擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現させることで、質感という新しい感覚を意識させることができるか、実践分析を通して明らかにすることである。

授業の概要は、次の通りである。

○題材名：「言葉の世界を写そう」

○実施年： 日時 平成23年3月22日（火曜日）第3校時
23日（水曜日）第3校時

○場所 上板町立K小学校

○学級 第5学年（男子女子合計30名）

○使用媒体：デジタルカメラを利用する。

○授業者：西園政史

B 授業実践の計画と展開

学習指導案 第5学年(2時間扱い)

日時 平成23年3月22日（火曜日）第3校時

3月23日（水曜日）第3校時

場所 上板町立K小学校

学級 第5学年（男子女子合計30名）

1. 題材名「言葉の世界を写そう」

2. 題材設定の理由

小学校第5学年にあたる時期の児童は、社会的な情報を活用して考えたり、直接体験し

ていないことに思いを巡らせたりすることができるようになる。材料の特徴をとらえ、想像力を働かせて発想させるために、質感に視点を置き素材の違いによる表現の多様性を理解させる。さらに、グニョグニョした、などの擬態語を写真撮影を通してとらえることで、多くの質感を体感しその感覚の幅を広げていく。

説明のための撮影ではなく（例えばリンゴを撮影することを目的とする）、形のない擬態語からイメージしたものを撮影することで、イメージすることを意識させることが可能となる。豊かな表現力を養うことにつながる。

【教材観】

様々な質感を知ることで、美術作品への強い関心を持たせる。さらには、その質感を利用して表現の幅を広げる。日常生活でよく利用されるデジタルカメラを使うことで、写真を利用した美術作品がより身近なものであることを認識し、創作意欲を引きだす手助けとなる。

【生徒観】

小学校高学年という時期は、好奇心が強く活発旺盛な時期になることから、素材への興味を持たせることで、自身の創作活動に新たな発想を生むことにつながる。自己の欲求も仲間や集団の規律で、絶えず摩擦を繰り返しながら、社会性を身につけて行く時期であることから、グループでの活動を行い協調性を身につける。

【指導観】

今回の授業では、意図的に質感を感受させることから、普段意識していない学校にあるものが質感の感受によって創作活動の一要素なることを実感させる。デジタルカメラを利用することで、日常生活の中にある様々な質感を発見し、創作へと結びつけることで図画工作への興味、関心を日常的なものとする。

3. 指導目標

- 鑑賞、批評し合うことで表現の違いを知り、互いの意欲を高め合う。【関心・意欲・態度】
- 身のまわりのものに対し、日常とは異なる視点を持ち、豊かな発想で質感の違いを見つけ作品としてつくり上げる。【発想・構想】
- デジタルカメラを利用し、擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現する。また、独創性のみを重要視するのではなく、他の児童に伝えることも意識する。【技能・表現】

○美術作品をつくるという視点においてデジタルカメラの利用方法を理解する。日常の場にある様々なものを質感として捉えることができる。【知識・理解】

4. 指導計画（全2時間）

第1時 カメラの使い方，擬態語の説明をし撮影を行う。

第2時 撮影した写真から新たな発見をし，他グループの作品を鑑賞，批評する。

5. 第1時の目標と展開

（3）本時の目標

①カメラの使用方法を理解し，写真を撮る。

②グループで協力しながら新たな質感を発見し出会う。

③目に映る情報だけではなく，触覚，音，動きなどからさらなる質感の探究を行う。

（4）準備

〈教諭〉 グループで一台のカメラ，学習ノート，擬態語の書かれたカード

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第1時の展開

展 開	時 間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ（自己紹介） ・本時の内容を説明する 「今日と明日で、皆さんにはカメラを使って探検をしてもらいます。まずこちらを見てください。」 ・黒板に書かれた「ごつごつ」から連想されることは何か質問し、答えさせる ・複数回答が出たら参考となる写真を例示する 「先生は、ごつごつという言葉からこのような写真を撮りました。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・席につき説明を聞く ・「ごつごつ」から連想されることをイメージし答える ・写真と言葉のつながりを理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が席に着くことを確認する ・説明時に、イメージが固定化されないよう注意する
展 開 I	10 分	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに、言葉の書かれたカードと学習ノートを配付する ・名前と言葉を記入させる ・個人で、言葉を見て感じたことを記入させる ・5分間、グループ内でその言葉から受けるイメージについて意見交換させ、記入させる ・以下の注意点を伝える ○グループでイメージした 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉カード、学習ノートを受け取る ・名前と言葉を記入する ・個人で、言葉を見て感じたことを記入する ・5分間、グループ（4人1グループ）内で、用意された言葉のイメージについて意見交換し、色々なイメージを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由な発想で、言葉から受ける印象を伝えあえているか確認する ・話し合いが止まってしまっているグループに対しては、例えとして身近にある物に触れたときの感覚を言葉にさせる ・言葉は、「つるつる、ざらざら、ふわふわ、

	<p>ものをもとに, 学校内で撮影するものを探し, 良いと感じたものがあつたら, 4人で同じものを色々な角度で撮影すること</p> <p>○触れる, 音を聞く, 動かすなどし, 視覚以外で感じることも意識すること</p> <p>○撮影枚数は一人1枚とし, グループで計4枚とすること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラをグループに1台貸し出すと同時にカメラ番号を学習ノートに記入させる ・黒板を使いカメラの使い方を説明する <p>「では, まず電源を入れてみましょう。次にモニター画面を見ながらシャッターボタンを押してみましよう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・走らない, カメラは水につけない, 落とさない, やさしく扱うなどの注意する点を伝える ・教室に集合する時間を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・注意点を聞く <ul style="list-style-type: none"> ・グループで1台のカメラを受け取る ・カメラ番号を記入する ・カメラの使い方を聞く <ul style="list-style-type: none"> ・時計を見て時間を確認する 	<p>ぐちゃぐちゃ」とする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラの取扱について, しっかりと理解させる (撮影, プレビュー)
--	---	---	--

展 開 Ⅱ	20 分	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内（校庭，校舎内）で写真撮影をさせる（雨の場合は校舎内のみとする） 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内で，言葉からイメージされるものを撮影する ・色々なところに目をやり，視線の角度を変えなどし幅広く探す 	<ul style="list-style-type: none"> ・校舎，校庭で撮影させる ・雨の場合は校舎内のみとする ・一か所にとどまらずに，視点を上下させたりし，観察させる ・触れる，音を聞く，動かすなどし，視覚以外の感覚を使い質感を感じるように伝える ・時間内に教室にもどるよう促す
ま と め	10 分	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタルカメラで，撮影してきた写真を確認させる ・カメラ，学習ノートを回収する ・次の授業内容を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・撮影してきたものを確認する ・カメラ，学習ノートを提出 ・次の授業説明を聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・戻ったグループごとに撮影出来ているか確認する ・すべてのカメラ，学習ノートの回収を確認する

(4) 第1時の評価

- ①カメラの使用方法を理解し，撮影できたか。
- ②グループで協力し新たな質感を発見し出会えたか。
- ③目に映る情報だけではなく触覚，音，動きなどからさらなる質感の探究ができたか。

6. 第2時の目標と展開

(1) 第2時の目標

- ① 自分たちで撮影した写真をグループ内でみて、気がついた点を伝え合う。
- ② 与えられた言葉がもっとも良く表現されている写真を選択する。
- ③ 学習ノートの記入と、批評を行うことにより自他のグループの作品の作品意図を理解し、表現の良さや個性による違いを感じとる。

(2) 準備

〈教諭〉 生徒が撮影した写真を印刷したもの、学習ノート、モニター

〈生徒〉 筆記用具

(3) 第2時の展開

展開	時間	指導者の活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業を振り返る ・再度、題材のねらいを伝える ・本時の流れを理解させる ・各グループに、自分たちで撮影した写真の印刷されたものを配付する 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までの内容を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・題材を再度理解させる
展開 I	20分	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで、印刷された写真を見ながら言葉のイメージが表現されたか確認させる ・グループ内で4枚の写真からもっとも擬態語を表現されていると感じるものを1枚選ばせる ・グループごとにテレビモニターに撮影した写真を映 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で4枚の写真からもっとも擬態語を表現できたと感じるものを1枚選ぶ ・他のグループの写真を見て、どのような擬態語が当てはまるか思考し答える 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で自由な意見交換が行われていることを確認する ・写真を読み解くことをさせる ・様々な考え方を理解させる

		し、他の生徒にどのような擬態語なのか答えさせる ・写真からどのような印象を受けたか答えさせる		
展 開 Ⅱ	15 分	・例で出した写真を示し、色や形について質問し答えさせる ・自分のグループの選択した写真にどんな色や形があるか学習ノートに記録させる ・自分のグループの写真で気がついたことを記入させる	・写真に写っている色や形について思考し、発言する ・自身のグループの写真について色や形について記入する ・自分のグループの写真で気がついたことを記入する	・色や形について視点を持たせる ・気がついた点を自由に書かせる
ま と め	5 分	・授業のまとめをする 「普段何気なく見ていたものも、少し違った視点や、意識して見てあげることで不思議な世界が発見できましたね。」	・話を聞く	・日常的に面白い視点、豊かな世界を発見する喜びを伝える

(4) 第2時の評価

- ①自分たちで撮影した写真をグループ内でみて、気がついた点を伝え合えたか。
- ②与えられた言葉がもっとも良く表現されている写真を選択できたか。
- ③学習ノートの記入と、批評を行い自他のグループの作品の作品意図を理解し、表現の良さや個性による違いを感じとれたか。

C 授業実践の分析と考察

分析方法は、ビデオ撮影による記録を基に行う。表9では、本課題の導入部分において、

筆者と児童との会話より、生活経験と擬態語とのつながりについて分析する。表 10 では、一つのグループが、擬態語から得られる質感をいかにして獲得するかを分析する。

授業記録は、筆者が行う授業を撮影スタッフ 1 名がビデオカメラを持ち撮影を行う。撮影スタッフによる記録は、一つのグループを授業の始まりから終わりまで撮影し続けている。その他に教室全体が撮影できるように定点カメラを一台設置し撮影した。合計 2 台のビデオカメラを使用しビデオ記録を行った。

表 9 では、本課題の導入部分での生徒と筆者との会話である。

児童 L は、筆者の「ごつごつから感じられることは何ですか？」という問いに対し、犬の鳴き声を表す「わんわん」と、雨の音となる「ごーごー」という擬音語について答えた。これは、「ごつごつ」という言葉と同種の言葉として、それ以外の擬音語と擬態語として答えを導いている。さらに引き続き、児童 L に対し質問内容を変え質問を行った。「ごつごつと聞いた時に感じる」と質問内容を特定し伝えた。すると児童 L は、「いわかやま」といった具体的な答えを導いた。さらに、岩や山の表情として「でこぼこ」という表現と共に答えている。

続いて児童 M に、他には何かあるか質問したところ、「かわ。かわのいし。」という答えを得た。さらに筆者の、「川を歩いたことがあるか」という質問に対し、顔を縦に二度うなずき、経験があることを答えた。この内容を読んだ多くの人が、素足で川を歩いた体験を思い出し、足の裏に感じる石の固さを頭に思い浮かべ、その質感を感じるのではないだろうか。つまり、児童 L も児童 M も、過去に自らが体験した内容を「ごつごつ」という言葉に当てはめ答えている。両者とも、言葉＜擬態語＞から受ける音の響きから質を思考し、経験との照らし合わせが行われたことが読み取れる。さらに児童 M は、自らの日常生活における直接的体験を交え「ごつごつ」に結び付け答えている。そこには、日常生活で得た「ごつごつ」という過去の体験が、この瞬間に筆者の質問が刺激となり深層意識より表層意識へと質感となって表出したと言える。

表 9 児童と筆者との擬態語に関するやりとり

	発話 () 括弧内は行為を示す
筆者	「ごつごつから感じられることは何ですか？」
児童 L	「あります。えっと、いぬのなきごえでわんわんとか、あめ、あめのおと、ぎーぎーとか、そういうぎおんごとかあります。」
筆者	「そうだね。じゃあ、ごつごつって聞いたとき何を想像する？」
児童 L	「えっと、いわとかやまとかのでこぼこです。」
筆者	「他に何かありますか？」 「同じ答えでもいいし、自分はこう思ったなど、あるかな？」 「(児童 HA に向かい) 何かあるかな？」
児童 M	「かわ。かわのいし。」
筆者	「あ、川にある石ね。」 「川とか歩いたことある？」 「その時、足が痛かったりした？」
児童 M	(二度頷く)

続いて、表 10 においてグループ活動内で意見交換を行った際に発生した、言葉の状態についてのやりとりを書き出す。

ここでは、擬態語と擬音語との違いについて意見交換が行われた。「ぐちゃぐちゃ」が表すものは、物から発生する音なのか、それとも、物の状態を表すのか、という内容となる。女兒 P と女兒 O の会話からは、「ぐちゃぐちゃ」が表すものは、音ではなく、見た目なのではないか、という結論に達している。もちろん、擬音語はものが壊れたり、擦れたり、ぶ

つかったりする場合にでる音響を表すものであり、擬態語は、事物のありさま、現象、動きや状態を描写的に表現したものであることから、どちらで捉えても正しいと言える。しかし、女兒Oと女兒Pの「ぐちゃぐちゃ」に対する考えのすり合わせでは、「見た目」がぐちゃぐちゃを表すのもであるとし進める。

この意見交換には、それぞれの持つ質感の差異が関係している。それぞれの経験は唯一無二であり、決して同じ経験は存在しない。しかし、言語化し意思を伝達することで初めてその感覚の類似点、相違点が共有可能となる。つまり、授業内において、感覚の共有は、環境が与える状況によって他者との関係が築かれ、そのことを言語化することで初めて共有できる意識として感覚が明確化すると言える。集団という環境は、話し合いという状況をつくり、言葉の新たな意味を構築したと言える。

表 10 擬態語と擬音語に関する会話

	発話 () 括弧内は行為を示す
撮影者	「例えばどんなもの？」
男児N	「きったないもの。」
女兒O	「きったなにもものはきったないな。このぐちゃぐちゃっておとはな。」
女兒P	「お、おと？」
女兒O	「おと？」
女兒P	「おと、おとじゃないんちゃう。」
女兒O	「おとじゃないか・・・。」
女兒P	「ぐちゃぐちゃって・・・おとじゃないな。」
女兒P	「みため？」
女兒O	「みためね。」
女兒O	「なまごみ。」
女兒P	「みためちゃう。」

では続いて、擬態語の言葉のニュアンスの違いによる意見交換の場面を表 11 に示す。

ここでは、個々が考えたぐちゃぐちゃのイメージについて、グループで意見交換し、撮影の方向性を絞る場面である。男児Nは自分の意見として、「かみをぐちゃぐちゃにするよ

うなかんじ。」と述べ、紙の状態をぐちゃぐちゃに当てはめ発言した。しかし、女兒0はその考えを否定的に捉えている。女兒0は、紙の状態は「ぐちゃぐちゃ」よりも「くちゃくちゃ」の方が適切であると発言した。さらに、女兒Pは、男児Nの考えをより詳細にするために、「まるめるかんじ？」と行為における質問をし、男児Nの考える紙の状態をさらに微細に理解しようとしている。紙は、しわが入ったよれた感じや、軽く擦れる感じでは、「くちゃくちゃになった紙」と表現されることがある。それに対し、両手を使って丸める行為からは、ぐちゃぐちゃとした印象を受けとることができる。女兒0はその会話を聞き、自身で言葉のニュアンスを確かめるように、「かみをぐちゃぐちゃするかんじ。」と独り言のように発言している。

続いて女兒Qは、納豆を混ぜる時の音という考えを発言している。この意見に対し、女兒Pと女兒0は、予想外の発言であったのか、両者は「たしかに」と発言し自身の中にはなかった考えに触れ、新たな質感を得ている。さらに、女兒0に関しては、納豆が好きである、といった日常生活を振り返った発言に至っている。

他者が発言する感覚的内容を理解できるということは、自らも同様となる質感を感受した経験があることになる。その経験は流動的な質の世界において存在し、他の事物によって関係性が構築され存在するものであり、決して単独で記憶されているものではない。つまり、「ぐちゃぐちゃ」であれば、紙を丸める行為、または、納豆をかきまぜる行為の中に、その行為に至った際の五感によって得た感覚と共に、その状況や環境といった広域にわたる内容が記憶されている。擬態語の刺激によって記憶されていた感覚は、言語化によって共有され、感覚による微細な差異を他者と認識し合うことで、その後の美術表現への基礎を構築することとなる。つまり、ここに美術作品のクオリティの根底が存在すると言える。

質感の微細な差異は、他者との摩擦によって自らの意識に問いかけを行う。自らの思考では表出しなかった質感を、他者の言葉によって表出に至る体験は、新たな気づきを獲得することになる。




以上3つの場面から、擬音語・擬態語と児童との関係を観察し分析を行った。擬音語・擬態語に関しては、特別な説明を必要とせずとも理解していた。ここで、特に注目したいことは、図画工作の授業内において擬態語と出会ったことで、児童のこれまでの経験が、想起され質感として表出した点である。このことは、自らの経験において感じた不断な事物について、言葉との結びつけによって分化を行い具現化し、他者に伝えるという内容が含まれている。つまり、言葉を体験し事物に意味を与えることは、表現力の基礎であり、



人間を形成する役割を担っていることになる。

表 11 擬態語の差異を確認し合う一場面

	発話 () 括弧内は行為を示す		発話 () 括弧内は行為を示す
男児 N	「かみをぐちゃぐちゃにするようなかんじ。」	女兒 0	「ぐちゃぐちゃ？」 (女兒 P の「ぐちゃぐちゃ」という発言と同時に)
女兒 0	(男児 N に対して) 「くちゃくちゃちゃうん。」		
女兒 P	「なんて? かみをぐちゃぐちゃ?」		
女兒 P	(男児 N に対して) 「なんか, あの, まるめるかんじ?」		
男児 N	(数回うなづく)		
女兒 0	「ちゃうよー。あれくちゃくちゃじゃよ。」		
女兒 P	(N に対し) 「ぐちゃぐちゃするかんじ?」		
女兒 0	(自身に語りかける感じで) 「かみをぐちゃぐちゃするかんじ。」		
女兒 P	「女兒 Q は?」		
女兒 Q	「なっとうをまぜるときのおとににている。」		
女兒 P	「なんて?」		
女兒 Q	「なっとうをまぜるときのおとににているってかいた。」		
女兒 P	「たしかに。」		
女兒 0	「たしかにな。なっとうすきよ。」		
女兒 P	「Q, あとはないん?」		
女兒 Q	「へやがきたなくなっているかんじ。」		

表 12 質感の差異を想像し、撮影場所を伝え合う一場面

写真	発話	行為
 <p>写真 12</p>	<p>女兒 0: 「つくえんなかどる？」</p> <p>女兒 0: 「だれのがいちばんきたなそう。」</p> <p>女兒 0: 「〇〇ちゃんまともきれい。」</p>	<p>教室内を歩き、撮影対象を探す。机を覗き込む。</p>
 <p>写真 13</p>	<p>女兒 P: 「0 あれは？」</p> <p>女兒 P: 「これぐちゃぐちゃちゃうん。」</p> <p>女兒 0: 「やけ、まわりがきれいだけ。」</p>	<p>教諭の机の周辺を観察し、物の状態から、擬態語との照らし合わせを行う。観察対象から感じられる内容の感じ方の違いを、意見交換によって伝え合う。</p>
 <p>写真 14</p>	<p>撮影者: 「これぐちゃぐちゃ。」</p> <p>女兒 0: 「これぐちゃぐちゃって。」</p> <p>女兒 P: 「あ、ほんまぐちゃぐちゃ。」</p> <p>女兒 P: 「あ、きれた。」</p> <p>女兒 P: 「あとなこれぜったいぐちゃぐちゃ。」</p> <p>女兒 0: 「あと Q。」</p>	<p>撮影者の発言によって後方にあった机の上の状況を捉える。しかし、そこを撮影するも、最初に見ていた後方の状況も適切であると意見している。</p>

	<p> 女兒0：「そといこう。」 女兒P：「これとったらそといこ。」 男兒N：「ごみ。」 女兒P：「あっこは？あのごみすてるとことか。」 女兒0：「ほうじゃ、そこいこ。」 </p>	<p> 教室内を観察しながら、他の環境を想像し、より適切な撮影対象を求め、グループのメンバー同士で意見交換を行う。この位置からは、外の風景が見えている。 </p>
<p>中略</p>		
		<p> ゴミ捨て場へ移動し、擬態語との照らし合わせを行い、撮影する。 </p>
<p>写真 16</p>		

続いての場面（表 12）は、グループ活動においてデジタルカメラを用いた撮影の場面となる。

表 12 の場面では、3 名の生徒が「ぐちゃぐちゃ」という擬態語から感じられる質感について意見交換を行い質感の比較を行っている。

このグループは、教室内に置かれている教諭の机周辺を観察し、書類や物が置かれている様子について意見交換を行っている。ここで重要なことは、「ぐちゃぐちゃ」という言葉から得られる感覚を、グループ 3 名が同じ状況から感じ、比較を行い経験していることにある。その場を共有し、比較し微細な差異を個々の感覚において表出させ、自身の感覚を認識することが行われている。女兒 P が「これぐちゃぐちゃちゃうん。」という発言を行い、それに対し女兒 0 は、「やけ、まわりがきれいだけ。」と発言し、それぞれが、ものの置かれた状況に対して、部分を見るのか全体的に捉えるのかといった観察する範囲の違いや、

「ぐちゃぐちゃ」という言葉の持つ感覚についての違いが、意見交換によって確認され共有することで、自身の体験から得るその言葉の持つ意味を定義づけている。

続いて女兒0が「そといこう。」と提案し、さらに、「あっこは？あのごみすてるところか。」と発言する。この時点で、「ぐちゃぐちゃ」という言葉の感じに対して、観察を行っていた教室内から、自身がこれまで見たことのある場所を頭に思い浮かべ、別な場所の提案を行っている。これは、教室におけるグループ内での意見交換がきっかけとなり、さらなる思考を行ったと言える。

この様に、他者の存在が自身の思考にアプローチし、目の前にある状況とこれまでの経験とを合わせ、言葉の響きにより対象の取捨選択をする行為が行われている。さらに、グループでの意見交換は、目に見えない「感じ」を具体化し共有することで共通の認識を持ったと言える。土台となる擬態語から写真撮影という行為を介して、自分にとっての言葉の意味を深く掘り下げていくことを体験し、質感の伴った言葉を得ることにつながっている。

松原は、「美術教育ほど幼少の頃から体験的に創造的人間活動の基本的態度を伸ばしていく教科は外にはない」³⁾と述べている。さらに、「幼児・児童・生徒へと成長する段階に即して、人間の外的能力と内的生命力とを縦横に組み合わせて統合をはかるような学習内容を積極的に取り入れていく必要がある。」⁴⁾とし、主体的に自己を実現していく能力を養うことの重要性を述べている。つまり、内的生命力は、日常生活を含む全ての体験が経験化することによって生成されることから、学校における授業内において、生活を含む全ての自分に触れ想像することが求められる。この関係が明確化し創造行為に至ることが、個性となって他者との差を生むと言える。そして、この経験が創造的人間活動の基礎となっている、と捉えることができる。

このグループが撮影した写真は、図 17 に示している。



写真 17 女兒 0



写真 18 女兒 P



写真 19 女兒 Q



写真 20 男児 R



写真 21 男児 N

図 17 ぐちゃぐちゃを撮影したグループの写真

(学習ノート)

『言葉を写そう』

5年 / 組 名前

【3月22日・火曜日】

① カードに書いてある言葉を、書き写しましょう。 『 く'ちゃく'ちゃ 』	② カメラの番号 A
③ カードに書いてある言葉から、感じたことを書きましょう。 糸をく'ちゃく'ちゃにするよ うな感じ 物がく'ちゃく'ちゃに ちがっていき感じ	④ グループで話し合ったことを書きましょう。 生2"ミく'ちゃく'ちゃにするよ うなかんじ 糸をく'ちゃく'ちゃにする うな音をませ"子時の音 に似ている おつくえの中がく'ちゃく'ちゃ ちがっていき

【3月23日・水曜日】

⑤ 写真の中には、どのような色や形がありますか？ しげしげした葉が なっている。オレンジ 糸糸... 水色茶色 四角	⑥ 写真を見て、感じたことを書きましょう。 はかくみたらこいなに く'ちゃく'ちゃした開物" おもしろいと思った。
---	--

図 18 生徒により学習の記録 (学習ノート)

(学習ノート)

『言葉を写そう』

5年 / 組 名前

【3月22日・火曜日】

① カードに書いてある言葉を、書き写しましょう。 『くちやぐち』	②カメラの番号 4
③ カードに書いてある言葉から、感じたことを書きましょう。 Amaga くちやぐち ちやにる屋と つくえの中がくちやぐち	④ グループで話し合ったことを書きましょう。 なまごみさぐちやぐち ちやにる屋と くちやぐちのちやにる屋と ちやにる屋と

【3月23日・水曜日】

⑤ 写真の中には、どのような色や形がありますか？ ・形はザガキガゼ 色はうすい赤 ・形は細長で色は青 ・形はくしで色は白 ・形は箱で色は茶色 ・形はいすで色はいすの色	⑥ 写真を見て、感じたことを書きましょう。 とこもまたなとてくちやぐち なとて思っ
--	---

図 19 生徒により学習の記録 (学習ノート)

(学習ノート)

『言葉を写そう』

5年 / 組 名前

【3月22日・火曜日】

① カードに書いてある言葉を、書き写しましょう。 『 くちやくちやく 』	② カメラの番号 ④ 722-5
③ カードに書いてある言葉から、感じたことを書きましょう。 おたけ...へやがくちやくちやく。 生ゴミがくちやくちやくにたってる	④ グループで話し合ったことを書きましょう。 ・生ゴミがくちやくちやく ・糸とをくちやくちやくにする時 ・なっとうをまぜる音にている ・つくえの中がくちやくちやく ・ちやくちやく

【3月23日・水曜日】

⑤ 写真の中には、どのような色や形がありますか？ 色 オレンジ 形 キガキガ 色 青 形 曲線太 形 しわくちやく 色 みどり	⑥ 写真を見て、感じたことを書きましょう。 みためは、くちやくちやくだ。
---	---

図 20 生徒により学習の記録 (学習ノート)

(学習ノート)

『言葉を写そう』

5年 1組 名前

【3月22日・火曜日】

11.15まで

<p>① カードに書いてある言葉を、書き写しましょう。</p> <p>『ぐちゃぐちゃ』</p>	<p>② カメラの番号</p> <p>4</p>
<p>③ カードに書いてある言葉から、感じたことを書きましょう。</p> <p>へやがちらが、ぐちゃぐちゃ になっている感じ。 ・ 敷正のっていい ところ</p>	<p>④ グループで話し合ったことを書きましょう。</p> <p>・ 生ごみがぐちゃぐちゃ ・ 紙をぐちゃぐちゃにする感じ。 ・ なっとうをませている時の音に いている。 ・ つくえの中がぐちゃぐちゃ ・ ちらかっている。</p>

【3月23日・水曜日】

<p>⑤ 写真の中には、どのような色や形がありますか？</p> <p>形…長方形、もともと四角のよ うな物をぐちゃぐちゃに まとめている。 曲線 ギサギサ しわぐちゃ</p> <p>色…青、白、緑、オレンジ、 シ、茶色</p>	<p>⑥ 写真を見て、感じたことを書きましょう。</p> <p>パッと写真を見た時 は、ぐちゃぐちゃだな と思ったけど、部分 的に1つ1つのものを 見てみると以外と敷正 理されていたりしていた から、見方によってい るいろいろあった なあと思った。</p>
---	--

図 21 生徒により学習の記録 (学習ノート)

(学習ノート)

『言葉を写そう』

5年 1組

名前

山口 智子

【3月22日・火曜日】

<p>① カードに書いてある言葉を、書き写しましょう。 『ぐちゃぐちゃ』</p>	<p>②カメラの番号 (4番)</p>
<p>③ カードに書いてある言葉から、感じたことを書きましょう。 ・なつをませる時の音ににている ・へやがきたなくなっている感じだと思ふ</p>	<p>④ グループで話し合ったことを書きましょう。 ・なまゴミがぐちゃぐちゃ ・へやがちらか、ているとき ・ぐちゃぐちゃにする感じ 紙・つくえの中がぐちゃぐちゃ</p>

【3月23日・水曜日】

<p>⑤ 写真の中には、どのような色や形がありますか？ 白・みどり・オレンジ・こい青 茶いろ・黒・赤・みず色・おにじの 長方形・丸・手の形</p>	<p>⑥ 写真を見て、感じたことを書きましょう。 いろいろな色や形がある 事を感じた。</p>
---	---

図 22 生徒により学習の記録 (学習ノート)

D 授業実践より得られた成果

本授業実践は、小学校第5学年を対象にしたが、小学校第1学年で行った授業実践の内容と同じとなる。学年は異なるが、質感を言葉から感じ、それを基に観察対象を取捨選択する行為は、同じと言える。授業観察からは、言葉から想起されたイメージが、一つのものに留まることなく流動的に次のイメージを想像していることが読み取れた。

第1学年と比較すると、教室内での意見交換の際に、言葉の持つ感じを生活の中から想像し幅広く発言していた。つまり、食事、生活空間、物の状態などと、日常生活における様々な時間帯について想像を働かせ、発言している。ものの現象だけではなく、状況、状態を含めた想像と言える。さらに、撮影対象を捉える際の範囲に違いが表れている。観察の際には、対象物を部分的に感じるのではなく、そのものが置かれた環境、周囲の状況を含め判断材料としている。つまり、第1学年よりも第5学年の方が、読み解く選択範囲が広域であり、部分的な感受のみではなく空間を意識した感受が行われていた。

擬態語の利用は、言語と質感との関係を体験的に認識するために用いた。さらに、デジタルカメラによる写真撮影によって、五感で得た質感を記録し作品制作の素材として利用した。デジタルカメラは、瞬間的に感じたことを撮影できるだけでなく、液晶モニターの存在によって撮影した内容を瞬時に確認することが可能なことから、自身の質感の感受と、画像として映し出されたものが関係性を持っていることを強く認識することが可能になる。身体を介して得た質感と、撮影された画像と、そのきっかけとなった言葉〈擬態語〉との三つの関係は、学校教育における言語活動の本質的な意味を担っていると言える。

生徒は、擬態語の持つ言葉の響きにより自身の経験と照らし合わせ、その言葉より感じる状態や具体的なものを思い浮かべる。次に、撮影対象を自身の手に触れるなどし、触覚を介して直接的に質感の感受が行われる。この時点で最初に想像していた内容が、五感を通じて実体のある質感となって認識される。最初の段階で想像していた内容が、実体を伴うことで生まれる差異や、合致によって対象を感じる内容は、より詳細になる。デジタルカメラの持つ記録と確認の機能は、その関係を具体的に、そして強固な存在へと導く役割も担っている。さらに、デジタルカメラは、児童の関心を一点に集中させることへの誘導にもなっていることが確認できた。

授業展開の第2時では、撮影した写真を鑑賞することで擬態語との関係をさらに構築した。今後の更なる展開として、映し出された写真をさらに再構築し、擬態語の持つ言葉の

イメージを創造し、つくりかえることが考えられる。擬態語の持つ感覚的な部分を抽象的な形を持って表現することで、新たな美的要素が発生する。このことは、言葉が恣意的であることや、本来個人の中で生成された言葉の意味ということをつまみとると、より個人の経験が反映された作品展開が見込まれる。

人間の本質的な部分を明確にしながらかを進めるこの授業実践は、学習指導要領でも示されている、小学校と中学校をつなぐ共通事項として、位置づけることができる。小学校で行った実践は、人間の普遍的な力を見出すことで作品が生成されていた。このことを、さらに深く掘り下げ、中学校において発展させた美術表現として形成することで、人間が持つ本質的な力におけるつながりが構築可能であると想定できる。

第2章のまとめ

第2章では、小学校における授業実践の内容とその分析を示した。第1節では、デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践の1つ目とし、小学校第2学年の授業観察より分析を行った。空想の生き物が、目の前に現れた時の反応を身体表現し、そのポーズを教諭が写真撮影を行う。その写真の人物の部分を切り抜きコラージュし、その周囲に絵画表現を行うといった授業内容である。分析内容は、図画工作の授業において、言語を介したやり取りによって日常生活における意識が抽出した場面を基に、授業内における言語の活用を示した。分析方法は、ビデオ記録による会話と行為の分析である。分析の結果、言語は、日常生活と芸術とをつなぐ役割を担い、言葉やイメージの獲得を発生させ、その経験は美術表現を介して個々人の深層意識に触れ、作品が形づくられることを示した。このことにより、美術作品による質的世界が生成されたことが示された。

第2節では、デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践の2つ目とし、小学校第1学年を対象に、擬態語から感じ取れる質感を感受し、デジタルカメラを媒介し写真による作品制作を行った。写真撮影と作品鑑賞を介し、質感という新しい感覚を意識させることができるか、実践分析を行った。分析方法は、ビデオ記録による会話と行為の分析と学習ノートである。分析の結果、小学校第1学年という年齢でありながらも、言語<擬態語>から新たな感覚を意識させ、質感の感受が行われていた。さらに、デジタルカメラは、感受した質感を具体化し美術表現として提示し、作品として成立させていたことが示された。

第3節では、デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践の3つ目とし、

小学校第5学年を対象に、擬態語から感じ取れる質感を感受し、デジタルカメラを媒介した写真による作品制作を行った。写真撮影と作品鑑賞を介し、質感という新しい感覚を意識させることができるか、実践分析を行った。擬態語における感じ方の微細な差異を、グループにおいて意見交換し、イメージの交換を行っていた。そこでは、個々人の経験によって得た感覚が擬態語と出会い、感じ方の差異を他者に伝えることで、イメージと言葉とのつながりを、明確に認識し合うことにつながっていた。

第 2 部第 2 章の註

- 1) E・W・アイズナー著, 仲瀬律久他訳, 『美術教育とこどもの知的発達』, 黎明書房, 1986, p. 141。
- 2) ジョン・デューイ, 栗田修訳, 『経験としての芸術』, 晃洋書房, 2010, p. 40。
- 3) 松原郁二, 『人間性の表現と教育—新しい美術教育理論』, 東洋館出版社 1972, p. 69。
- 4) 同上, p. 72。